佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園中学校・高等学校 校長　佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）、・ワシントン補習授業校を経て、現職。

帰国生プラス国内生

◆ 得意を生かすチームワーク

先日、高校生の「ビジネス・アイデア・コンテスト」という催しが行われました。課題となるテーマを受け、ビジネスのアイデアを英語でプレセンテーションするというものです。いろいろな情報を集め、独創的な計画を立てて、具体的な資料を示しながら、実現の可能性があることを立証しなければなりません。二人一組のチームで参加します。

このコンテストで、啓明学園高校２年生の男子生徒二人の組が最優秀の成績を収め、国際大会に進むことになりました。私たちを特に喜ばせたのは、この二人が、日本国内で育った生徒と、海外のインターナショナルスクールから帰国した生徒の組み合わせだったことです。違う環境で育った子どもたちが、それぞれの強みを発揮することで、組み合わせがなければ期待できない大きな力が生まれることを目に見える形で示してくれたからです。

国内で育ったＡ君と帰国生のＢ君は、プロジェクトの最初から、ユニークな発想でたくさんのアイデアを考え出しました。調査の段階では、日本語と英語の資料を幅広く集め、短期間で読みこなしました。電話でも日本語と英語でたくさんの人に質問して情報を集めました。

表彰：力を発揮した二人

プレゼンテーションの時も、二人で上手に分担しました。データの説明などは主にＡくんが、始めと終わりなど、聴衆に語りかけるようなところは主にＢくんが担当しました。質問を受けるときは、Ａ君が資料を準備し、Ｂ君がそれを見て答えるなど、非常によいチームワークでした。

このことはまた、資料や事実にもとづいてしっかり考える力をつけていれば、何語で勉強した子でも、同じテーマのもとに協力し合えることを示しています。具体的に学習してきた内容が同じでなくても、共通のものを積み上げていくことができるということです。むしろ、ちがうことを知っている人の組み合わせの方が、おもしろいものを生む可能性が高いと言うこともできます。

別の見方をすれば、どの国の学校でも、ほかの言語で学習することになっても通用するような考え方や、情報処理の技術、コミュニケーションのスキルなどを身につけさせるような指導をしていくことが期待されるということになるでしょう。

◆ 助け合って力を伸ばす

啓明学園では、中学・高校の英語は生徒の学習の状況に応じてクラス分けをするシステムです。帰国生が多数を占めるクラス、国内生がほとんどというクラスもありますが、帰国生と国内生が混じっているクラスでは、両方の生徒が力を出し合う場面が見られます。例えば、国内生には、英語の指示が聞き取りにくい場合がありますが、そんなときは帰国生が耳打ちをして助けてくれるので、先生は遠慮なく英語で話すことができます。帰国生の中には、話すのは得意でも、正確な文章を書くのに苦労する子がいますが、日本語の説明を理